

【コメント】

郭先生発表へのコメント

藤善 真澄

関西大学

郭先生のご発表を拝聴してまず感じたのは、さすがに一字一句を忽せにしない慎重な分析であり、アプローチの仕方であるということ。対照とされる時代が時代だけに一字に拘泥せねばならないという無理からぬ面があり、資料にも限界があるため、さまざまな角度からの議論や見解が出されるであろうとの予感を抱く。郭先生が注目された朝聘儀礼は確かに王権のありようを考察する上で、欠かすことのできないキーワードの一つであり、時代によっては国体そのものといっても過言ではない性格と内容を持つが、それも古典の世界では事情がかなり違ってくる。

郭先生は言及されなかったが、甲骨文字の中に朝聘の雛形とも称すべき貢納の資料が出てくる。殷代の社会では血縁を主体とする氏族を基本単位に邑が形成され、邑と邑の力関係、力量によって支配と被支配ないし従属関係が生じていたとの基本認識がある。その頂点に立つ殷王朝の支配は都城周辺の直轄地いわゆる内服、内服の周辺に割拠する外服、さらに外服の彼方、方と呼ぶ独立国群、つまり距離の遠近によって分ける三種の支配構造からなっていたといわれるが、支配・被支配の関係が成立していく過程についての見解は分かれ、婚姻関係のほか、祭祀あるいは多子・田疇集団と呼ばれる世襲の特殊技術や職業団体の存在などが注目されている。現在コメンテーターの院生の一人に殷王朝の支配、王権のありようを貢納関係のト辞より解明しようとする者がおり、その見方は核心を突くものと期待しているが、入・乞・示といった記事刻辞に盛り込まれた亀甲、牛骨などの徴収や貢納そして関係する氏族集団がクローズアップされ、殷王朝の支配構造にリンクしていくという次第である。まさに王権の萌芽、郭先生が扱われた周代のベースとなっており、その意味で権力の象徴ともなる朝聘の儀礼が、原始社会の村同士における物々交換や贈答の習慣に始まったとする説明に通ずるものがある。

ところで郭先生は周王室の王権を儀礼の分析によって浮き彫りにされた。王位の継承、諸侯の封建、官吏の任免、賞罪にいたる冊命の礼、王と諸侯、諸侯間の従来における朝覲儀礼および聘門の礼などを手懸りに西周時代の支配力、王室の権威や秩序の強大さを明らかにする一方、周王朝の権力が衰え春秋・戦国の時代に入ると、実力のある諸国が古い礼節否定すなわち周朝の権威を認めなくなった。つまり王権の失墜はとりもおさず礼節の崩壊ないし質的变化を促していった、とみる。西周末の夷王が始めて堂を下り諸侯と接見した話は、王権の衰えを示すものとして特筆されるが、こうした資料を駆使しての論証には実に興味深いものがある。

問題なのは、先に指摘したト辞などの場合、解明が不十分とはいえ生きた資料であり、その分析は当時の史実に直結するものとして疑いようがない。郭先生が扱われた簡牘や青銅器なども同様である。ところが周代の礼制の大部分は、編纂に編纂を重ねた經典類に描き出されたも

の。歴代の王朝が常に理想とし憧れ、王政はたまた政治の要諦とした古典に依拠せざるを得ない事情がある。後世の王権を考え、礼制の実態を知る資料とはなりえても、『周礼』ほか『左伝』等に及ぶ編纂史料と往時の礼制や史実との間で、どれほどの整合性を求め得るのか。従来も吟味されつづけてはきたが、今回の御発表にも改めて問い直されようし、また問う必要がある。一例を挙げれば礼制における五礼、いわゆる吉礼、凶礼、客礼、軍礼、喜礼は唐の『開元礼』などにも直結しうる内容であるが、そのままを西周代のものと即決すべきか否か。五礼という形そのものに、既に作為的、意図的な臭みを感じるというのも無理からぬものがあり、況や細目においておやである。是非とも今後の考古学的成果との整合が行われることを期待したい。